

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

インド被災地の現状と今後の課題： 復興の現状と文化財の被災

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深尾, 淳一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001386

— インド —

司会：それでは、続きまして、深尾さんに「インド被災地の現状と今後の課題—復興の現状と文化財の被災」というタイトルでご報告をお願いいたします。

インド被災地の現状と今後の課題 復興の現状と文化財の被災

深尾 淳一

拓殖大学 政経学部

深尾です。よろしくお願いいたします。

1 第2次インド被災地社会調査

今回のインド被災地社会調査は2回目にあたります。前回は、昨年2月から3月にかけて2週間から3週間ほど、こちらの民族学博物館の杉本良男先生、京都文教大学の杉本星子先生、そして私の3人が中心になり行いました。今回は、それに続く2回目のインド被災地の社会調査として、昨年の7月24日から8月31日まで私が現地を訪問してまいりました。

調査地としては、中央政府の役所等も調査いたしましたので、ニューデリー、そして南インドのタミル・ナドゥ州の州都にあたりますチェンナイ（マドラス）、それから、タミル・ナドゥ州で被害が大きかったカーンチプラム県とナーガパッティナム県の各地を訪れました。ナーガパッティナム県が南インドでは最も被害が大きかったところです。

なお、今回の調査は、民博の林先生を研究代表者とした文部科学省科研費の「アジア太平洋地域における自然災害への社会対応に関する民族誌的研究」の一部として行われました。

調査を行いましたのは、地図にはニューデリーは入っておりませんが、ニューデリー、州都のチェンナイ、それから最も被害が大きかったナーガパッティナム県の各地（図1）。さらに、前回2番目に被害が大きかったカンニャクマリー県という最も南の県と、それに次いで被害が大きかったカダール県は調査しましたが、それに続いて被害が大きかったカーンチプラム県というチェンナイからすぐ南の地域については前回全く調査しておりませんでした。そこで今回はこちらの県も調査してまいりました。

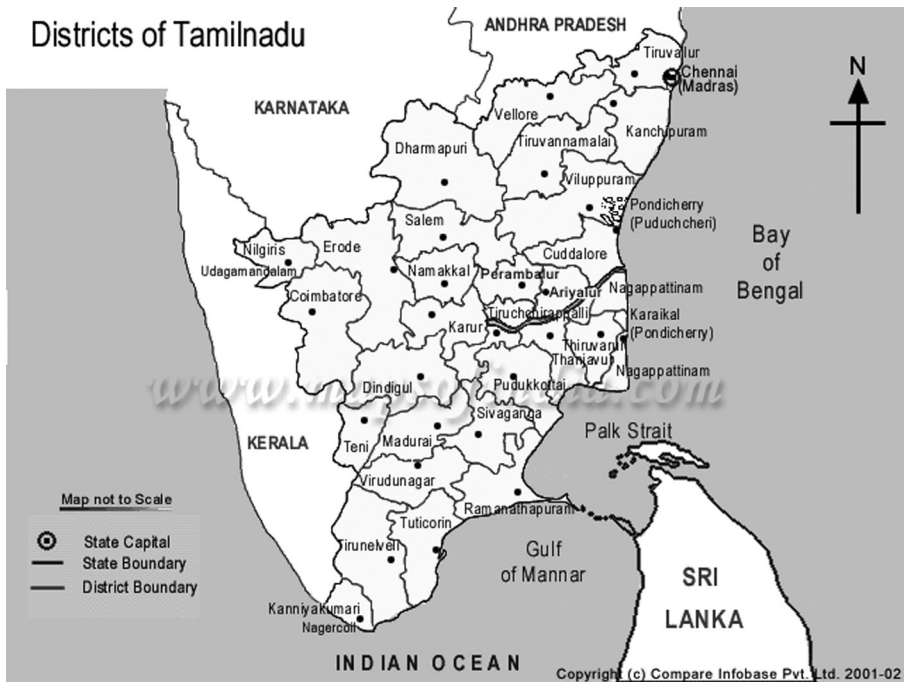


図 1

2 今回の調査の目的

第 1 回の調査は被災から 2 カ月後ごろに行ないましたので、その際には、被災直後の対応、あるいは被災民がどのような動きをしたかというようなこと、あるいは緊急支援・緊急援助活動を中心にして調査を行いました。今回の第 2 次調査としては、私自身が、考古学を専門にしておりますので、特に文化遺産の被災状況と、あるいはこれからの文化遺産の防災についてどのような対応を考えているのかという問題について、それをメインの調査目的といたしました。

大規模災害と文化遺産の保護の問題につきましては、既にイラン南東部地震で、バム遺跡がかなり大きな破壊を受けまして、その後、世界遺産としても危機にさらされている文化遺産ということで登録されたり、あるいは日本の場合でも数々の文化財、例えば、広島の大厳島神社が台風に対してどのような防災力を持っているとか、五重塔が地震に対してどれぐらい抵抗力があるとか、そうした研究が多少行われたりしています。

今回のインド洋津波災害につきましては、スリランカの南のほうにゴールという城塞がありますが、その被害の調査とか、あるいはその周辺の調査などを、筑波大学、東京芸術大学、文化財研究所などが合同で行っておりますし、インドネシアにつつま

しては、アチェの文化財といますか、文書ですね、記録、土地台帳だとか、そういった文書について、日本のNGOなどがその修復に協力している例があります。インドの場合はどのような文化財の問題があるかということを中心にテーマとして調査してきました。

それ以外にも、文化財、文化遺産というのは、歴史的、文化的な意味を持つものだけではなくて、観光資源としても重要なものですから、そうした観光の面でどのような影響があったのか、あるいは、どのような観光関連の役所が、部署が対応を見せたかということも調査の内容に加えました。

さらに、今回の調査は、前回の2月、3月に訪れてからその後かなりたっていて、津波が実際に起こってから半年以上たっておりますので、復興事業がどのような形で進んでいるかということについて、特に恒久住宅の建設とその住宅への移転の問題にかかわるところについても、調査の目的として多少加えて調査いたしました。

3 文化財の被災状況

3.1 マーマッラプラム (Mamallapuram)

まずは文化財の被災の問題についてですが、幾つかの遺跡を見たわけですが、その中で特に一番大きな遺跡としては、マーマッラプラム (Mamallapuram) という遺跡がチェンナイからすぐ南にあります。ここにありますが「海岸寺院」は世界遺産に指定されておりまして、8世紀初めにつくられたインドでも初期の石造りの構築寺院です。

この寺院の被災状況としましては、寺院内部が一部浸水しまして、土砂が堆積したり、その寺院の構築物の基礎部が露出したりとかいうことが起こりましたが、寺院本体等には大きな影響がありませんでした。後で写真でごらんいただきますが、寺院のすぐ前面には大きな石を使った防塁がつくられており、これが寺院の破壊を防いだ大きな理由というふうに考えられます。

さらに、注目されるのは、今回の津波を契機にして、海岸寺院の周辺に新しい遺跡が発見されたということがあります。そのために、水中考古学的な調査が行われました。海岸寺院の沖合の水中を調査して幾つかの遺構が発見されたり、あるいは海岸寺院のすぐ南の砂浜から新しい寺院の遺構が発見されたり、この寺院の遺構については、前回の2月、3月の調査で見えてきたんですけど、今回の調査では、さらに新しい遺跡が海岸寺院から北のほうに発見されていて、これは歴史的にも海岸寺院からさらにさかのぼるような古い時代の寺院ということで、注目されています。

少し写真をごらんいただきながらご説明をしたいと思います。これが、世界遺産に指定されていますマーマッラプラムの海岸寺院です (写真1)。8世紀初めの石を組み立

ててつくった石積みの構築寺院です。この寺院の前面には防塁があります。海岸側には防塁がありますので、直接そちらからは水は入ってきませんでした。ただ、防塁の切れ目がありまして、その切れ目の横側から水が浸入することになりました。横側にはブロックと金網でフェンスがつくられていたんですけども、この部分を破って水が中に入り込んでいます（写真2）。写真奥に海岸が見えますが、海岸寺院は左手奥の方で、写真中央から水が入ってきたという感じです。

これ（写真3）は、実際の被害の次の日にインド考古局がとった写真です。こういった形で水浸しになって、幾つかの構造が露出している、あるいは、破壊を受けている部分もあります。

水が引いた後を見ますと（写真4）、この基壇部が完全にえぐられて露出しています。

ここが海岸寺院の本殿にあたる（写真5）わけですけども、本殿の床あたりまで土砂がやってきたということです。これは津波の翌日にとられた写真です。津波が来てすぐにインド考古局も被害状況はどうかということで調査しているということです。

このように、寺院の状態は、基礎が多少露出したりとか、細かい破損はありましたけれども、大きな被害はなかったということが言えると思います。

一方で、先ほど言いましたように、新たな発見もなされました。津波が来る前には一度水が引いたものですから、沖合にいろんな石が露出しています。その中には幾つか構築物があることがわかっています。ですから、その津波があった後、2月に水中考古学的調査が行われました。海岸寺院の沖合を調査して、幾つかの構築物が発見されています。

さらに陸上でも、これは海岸寺院からすぐ南にあり（写真6）、海岸寺院と同じ時代のものだと考えられますが、かつては半分ぐらいの高さまでしか露出してなかったものが、津波の影響で砂が取り払われて、その下にも同様の彫刻があるということが知られました。

そして、この彫刻のすぐ近く、海岸寺院のすぐ南に新たな遺跡があることが発見されました。寺院の跡なんですけれども、本来は、ここ2～3年ぐらいインド中央政府の考古局はこの周辺で発掘調査を行って、水中考古学の発掘調査も行っているのですが、津波前には、先ほど写真でご覧いただいた彫刻をもった石の下を掘る予定だったんです。ところが、津波によって、その近くで新しい遺構が露出したものですから、そこを掘ってみようということで、急遽計画を変えて、そちらのほうで発掘調査が2月に行われました。

これが発掘調査の模様です（写真7）。この調査によって、寺院の遺構が露出し、後で土器の破片が出てきまして、それに文字があったものですから、やはりパッラヴァ朝のものだということがわかりました。つまり海岸寺院と同じ時期のものだということです。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8

これは、今回7月に行ったときにとってきたものです(写真8)。左奥に少し見えるのが海岸寺院でして、手前が今回発掘された寺院です。奥の四角の部分がその本殿で、周囲を囲む壁の一部がその周りにこのように露出しています。こういう新しい遺跡が発掘されました。

さらに、今回の調査では、別の新しい遺跡も発掘されています。これは、マーマツラプラムから北に行ったところのTiger Caveと呼ばれる遺跡です(写真9)。マーマツラプラムのいわゆる観光地として知られているところからは少し外側になります。このTiger Caveは以前からあった遺跡なのですが、そのすぐ近くに石がありまして(写真10)、この石に碑文が書かれているというのは以前から知られていたのですが、それは大体13世紀ぐらいの碑文で、そこには、スブラマニヤという神様に捧げた寺院があるということが書かれていました。

今回の津波で、かつて知られていた碑文に加えて、石の反対側の海岸に近い面から砂が取り除かれまして、そこにも碑文があることがわかりました。そこには10世紀中ごろの碑文で、やはりスブラマニヤという神様に捧げた寺院があるということが書かれていました。

それで、インド中央政府の考古局は、このあたりを発掘すれば、寺院が見つかるのではないかと想定し、かねてからこの周辺にかつて寺院に使われたと考えられる石材がいくつかありましたので、このあたりを掘ってみますと、こういった形で、石積みの寺院がやはり出土しました(写真11)。

ここでは写真では出ていませんが、石柱が2本見つかりまして、その石柱に碑文があって、やはりパッラヴァ朝の寺院だということがわかっています。

さらにこの寺院を掘り進めますと、その石積みの構造のすぐ下にレンガづくりの構造が発見されました(写真12)。こういったレンガづくりの構造というのはそれほど知られているものではありませんですし、パッラヴァ朝の寺院よりも下にありますから、さらに古い時代のものというふうに考えられています。詳しいことは調査途中ですが、このような形で新しい寺院が発見されているという状況もあります。



写真9



写真10



写真11



写真12

3.2 サドラス城塞 (Sadras Dutch Fort)

ほかの文化財の被災状況を見ますと、サドラスという城塞があります。これは17世紀のオランダ東インド会社の本拠地としてつくられた城塞です。これは、チェンナイから南のカーンチプラム県、先ほどのマーマッラプラムの遺跡からさらに少し南に行ったところになります。ここは先ほどのマーマッラプラムと同じで、中央政府が管轄する遺跡になっています。

ここは、かつては破壊されたままだったのですけれども、1991年以来、中央政府考古局がこの遺跡の修復を進めておりまして、中央政府の考古局が再建した外壁があったために、海岸からほぼ100メートルぐらいしか距離はないのですが、内部にはそれほど水が入らなくてすみました。

これがサドラスの遺跡のすぐ手前の海岸でして (写真13)、中央にぼんやり見えるのはカルパッカムという原子力発電所で知られているところです。この原子力発電所も、津波によって被害があったのじゃないかということで心配されたのですが、今回の津波の際には、水が多少入ったぐらいで被害はなかったそうです。

海岸にすぐ面してこのサドラスという城塞があります (写真14)。城塞の中は、このような感じで、17世紀にオランダが貿易港としてこのサドラスの港を使っていたときに、本拠地となっていたところです。

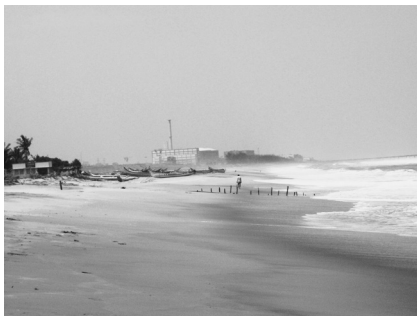


写真13



写真14

このような形で壁があるのですが（写真15）、手前のは古い、もうかなり崩壊している壁ですが、考古局が新しく10年少し前に建てた新しい壁が外側にありまして、この再建した壁のために、海岸からすぐ近いにもかかわらず、ほとんど中には水が入らなくて、被害を受けなかったということです。



写真15

3.3 タランガンバーディ（Tarangambadi）

次には、今度はタランガンバーディという、前回2月、3月にも訪れた遺跡です。これはデンマーク人が建造した城塞です。こちらは中央政府の管理ではなくて、州政府、タミル・ナードゥ州政府が管轄している遺跡です。

こちらのほうは、前回訪れたときには詳細な被害状況を確認することができなかったため、今回は、時間をとって確認することをしてきました。それによりますと、この城塞のちょうど海岸に面している基部が多少損傷を受けているということがわかりました。

さらに、そのすぐそばにはマーシラーマニナーダル寺院という15世紀の古い寺院がありまして、この寺院も前は被害を確認しただけでしたが、今回は詳しく状況を確認することができました。もう既に50年前、40年前以上から、サイクロンなどで起こった高波で崩壊がかなり進んでいまして、今回の津波で崩壊したのは、それほど大きな部分ではなく、寺院の後ろ壁が崩壊しただけだったということがわかりました。

写真でさらにご説明いたします。こちらがタランガンバーディのダーンズボルグ城という城塞です（写真16）。これも海岸からもうほとんどすぐなんですけど、城塞の基部が破壊されただけで、このほか、海岸側の中央部あたりから水が中に入ったそうですけれども、中はほとんど被害はなかったそうです。こちらがそのマーシラーマニナーダルと



写真16

いう寺院です（写真17）。これは、今の城塞のすぐ北側にある寺院ですけれども、こういった形で既に40～50年前から崩壊がかなり進んでいました（写真18）。毎年のサイクロンで破壊が進んでいたものであって、今回の津波で被害を受けた部分ではないようです。

これは、その40～50年前の寺院の様子でして、こういった形で寺院の塔があった



写真17



写真18

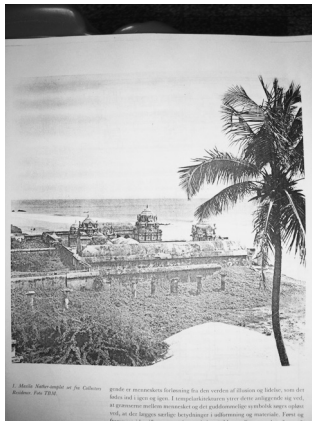


写真19



写真20

ものが、だんだんサイクロンで壊れていったということです（写真19）。

今回被害を受ける前に、もう既に崩壊していましたのは、全面の塔の部分あたりなんですけれども、今回の津波では、こちらの後ろ壁の部分が壊れてしまったということだそうです（写真20）。ですから、寺院自体はすぐ海岸に面してしまっていて、毎年のように被害を受けていて、今回の津波でそれ程被害がなかったのは、既に壊れるべき部分が壊れていたからということなのかも知れません。この部分の後ろ壁が壊れたというのは今回の津波による被害だということが、今回の調査でわかりました。

3.4 アーランバライ城塞（Arambarai）

4番目にご紹介するのは、アーランバライという城塞です。南インドの東海岸部にはかなり幾つかの城塞がありまして、デンマークとか、オランダとか、そういった海外の勢力による城塞もあります。このアーランバライという城は、17世紀末にムガル朝が建造した城塞でありまして、その後、フランス人とか、あるいはイギリス人なども利用したと伝えられています。

こちら中央政府ではなくて、州政府が管轄している遺跡です。先ほどのタランガンバーディに比べますと、知名度はかなり低くて、現地の人でもあまり知らないような遺跡で、管理が非常に整っていないという状況です。

先ほどのタランガンバーディのように、直接海に面しているわけではなくて、内海に面しているにもかかわらず、こちらのほうは、タランガンバーディのような被害にはとどまらず、大きな被害を受けました。

州政府考古局は、州政府が管轄している遺跡被害の報告を受けていまして、私も州政府の考古局を訪れてこの遺跡の被害を知ったわけです。そういう形で幾つかの遺跡の破壊は州政府考古局もちゃんと把握はしているのですが、実際にどの程度の被害の規模があったのか、あるいは修復対策にどれぐらい費用がかかるのか、どういうふう修復していくのかなどということは、まだ全然対策がなされていないというのが8月時点での現状でした。

これがそのアーランバライという城です（写真21）。このような城塞で、内部は既に崩壊がかなり進んでいる。それは津波によって崩壊したのではなく、管理が進んでいないということです。

遺跡の沖には砂洲があって、内海になっており、本来津波の影響を弱めそうにも思いますが、それをものともせず津波が中に入って被害を及ぼしています（写真22）。こ



写真21



写真22



写真23



写真24

れは多分津波によって削られてしまった部分だと思いますけれども、そういうふうな被害が起こっているという状況ですね（写真23）。

ここも同じ城塞なんですけど、かつてはここに立つ人の胸あたりまで砂があったそうですが、その砂がえぐり取られたということを言っていました（写真24）。

このような形で、文化財にも、被害を受けたものと被害を受けなかったものがあるということがわかんと思います。

3.5 博物館等施設の被災状況

一方、それ以外の博物館等の文化財関連の施設についての被災状況についてお話ししますと、まず、州立のナーガパッティナム博物館、一番被害の大きかったナーガパッティナムという被災地にある博物館です。この博物館は、海岸から数百メートルというところにあります。ただし、津波が起こったのが朝早かったおかげで、だれも来館者がいなかった。それから、職員がたまたまいて、その扉を閉じたことによって、被害はそれほど大きくなくてすみました。だけど、扉を閉じたにもかかわらず、その扉をこじ開けて水が腰あたりぐらいまで入ってきたというふうに職員が言っていました。被害を受けたのは展示ボード、電気で点灯するようなボードなどが被害を受けたようですが、遺物等は特に大きな被害はなかったようです。

ただ、ナーガパッティナムというところは、ブロンズの仏像で非常に有名なところでありまして、仏像のような貴重な展示品は、津波の被災があった後、周辺がかなり無法地帯的な状態になりましたので、そういった状態の中で略奪されたりとか、破壊されたりとか、そういうことを避けるために、貴重な展示品は、すぐ内陸のティルヴァールルまで移転させられました。

それ以外の博物館としては、先ほど城塞をごらんいただいたタランガンバーディの博物館があります。ここも職員がいて、門を閉じたので大きな被害はなかったのですが、それでも戸をこじ開けて水が多少入ってきたと言っていました。

こちらがナーガパッティナムの博物館です（写真25）。このような形で、すぐそばまでボートが運ばれてきているぐらい海岸にすぐ近いところに、海岸に面して博物館が建っているという状況です。博物館正面の扉を閉じたのですが、それでも1m以上の高さまで水が入ってきたと言っていました。それによって、展示用の電気で点灯するようなボードが倒されて、壊れてしまったということです。ただ、文化財、遺物とかの被害はほとんどなかったようです。これは、中にありますブロンズ像を展示する部屋ですけれども（写真26）、水が展示ケースのすぐ下あたりまで来たそうです。ここにある文化財・ブロンズ像は、私が行ったときにはもう搬出して、ティルヴァールルという所にある別の博物館のほうに保管されているということでした。

一方、先ほどごらんいただいたタランガンバーディにある城塞の横側にもこのような



写真25



写真26



写真27



写真28

博物館があります（写真27）。この門を入ったところが博物館の入り口です。職員が当時、朝、海のほうで大きな音がするというので、上に登ってみたら、波が押し寄せているということで、あわてて扉を閉じています。この扉は2～3年前に新しく新設された分厚いチーク材の大きな扉なんですけど、扉の下にこういった形で傷がついていますし（写真28）、この扉をこじ開けて水が中まで入ってきたということを言っていました。

3.6 文化財の防災対策

このように文化財の被災状況はいろいろあります。今回、いろんなところを見てきて、本来は津波対策ではなくて、海岸の浸食とか、あるいは高潮の被害とかいったものを避けるためにつくられた石造りの防塁が津波の防災に大きな役割を果たしたということがわかりました。

先ほどごらんいただいたマーマッラブラム、それから、プーンプハール (Poompuhar) というのは、これは遺跡ではありませんが、かつて大きな港があって繁栄していたところで、先ほどの渋谷先生のご報告にも伝承の話がありましたが、ここも洪水によって水の中に沈んだという話があり、それが津波じゃないかという話もあるようです。プーンプハールにも同じような防塁があって、本来は海岸浸食防止用につくられたのですけれども、それが大きな役割を果たして被害が少なかったというところもあるようです。

マーマツラプラムのような非常によく知られた、著名な主要遺跡については、深刻な被害がなかったため、中央政府の考古局などにも「特に被害はなかった」というふうに報告されておりまして、中央政府の考古局も特に今後の対策は立てていないという状況です。

一方で、先ほどごらんいただいたアーランバライのような知名度の低い、州政府が管轄している遺跡の場合には、昔から管理も不十分でしたし、今回もその影響で大きな被害を受けている。その被害についても、実際の詳細についてはまだ詳しい報告がなされておらず、今後の対策も不十分である、まだ未定であるという状況です。

一方、博物館については、これまでの対策としましては、無法地帯になった状況の中で略奪等を避けるための貴重な文化財の移転という対策はかなり迅速に行われたということがわかります。

今回の被害を契機として新しく考慮されているのは、収蔵品目録をその博物館だけではなくて幾つかの博物館でコピーを持つということが考慮されているようです。それ以外で、後は、博物館局の局長に尋ねても、なかなか資金がないのでということで、ナーガパツィナムの博物館、先ほどごらんいただいた博物館にしても、本来は間借りをしている施設として、昔から移転先を探しているのだけれども、なかなか見つからないということで、資金面でかなり苦労していると言っていました。

これは、その防塁の例です（写真29）。これがマーマツラプラムの海岸寺院ですが、その前面に石造りの防塁がつくられています。上から見ると、こんな感じになります。かなり分厚い防塁があって、これが津波が直接正面から入ってくるのを防いだということです。そのために、津波は向かって左奥側から入ってきて、そこを破って中に入ってきたそうです。



写真29

この防塁自体を図で見ると、このようになります（図2）。20世紀の初頭には小さな石積みの壁しかつくられていなくて、1935年ぐらいに多少大きな壁はつくられたのですが、現在の防塁がつくられたのは1980年代になってからということだそうです。かつてはこういった低い壁が寺院の前面にあっただけで、寺院のすぐそばまで水が来ていました（写真30）。

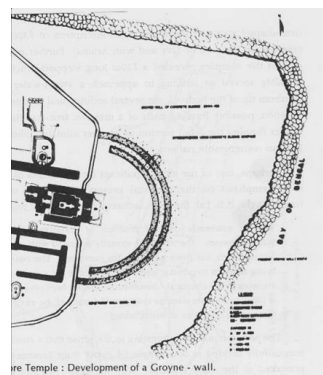


図2



写真30



写真31



写真32



写真33

この低い壁のままだったら多分寺院自体はかなり被害を受けたと思います。その後、それでは不十分だということで、多少大きなコンクリートの壁が前面につくられました(写真31)。それでもまだ不十分だろうということで、現在の大きな防塁をつくるということになったようです。

こちらは、先ほどご紹介したプーンブハールという遺跡というか、観光地になっているところですけれども(写真32)、こちらでも海岸浸食防止用にこうした防塁がつけられています(写真33)。ここ自体は、文化遺産・遺跡ではありませんで、現在は観光地として、かつての面影をしのぶというところになっております。多少そういう観光用につくられた施設が津波の被害を受けていますが、この防塁があることによって、海岸通りの露店などは直接水が入ってこなくて、この防塁が切れた切れ目から、横から水が入ってきたおかげで、大きな被害は受けなかったと露店の人も話していました。

4 観光関連機関の対応

続いて観光のお話をいたします。観光関連の復興対策としては、中央政府の観光省は特に大きな役割を担ってなくて、州政府の観光局が主体になって、観光の復興事業をやっています。中央政府は、観光関係のインフラ整備のために資金を供与するのが主な役割になっています。

タミル・ナードゥ州は、この観光関連のインフラ整備のために、大体5,000万ルピーの資金を中央政府から得ているというか、認可を得ているという状況で、今のところ1,500万ルピーが供与されているのだそうです。

その点で注目されるのは、タミル・ナードゥ州ではなく、アンダマン諸島です。中央政府は、このアンダマンのプロジェクトにかなりの力を入れていまして、中央政府から550億ルピーのお金を拠出して、観光関連の事業をやろうということで進められているようです。

一方、タミル・ナードゥ州政府の対応ですけれども、州政府の観光局は、津波の被害があった後、いろいろ対応をやりまして、例えば、外部からの「津波の被災地はどうなっているのか」「観光地は大丈夫なのか」という問い合わせに対応する担当官を任命したり、あるいはヘルプラインを設けたりとかいったことをやりまして、それから、津波の被害が大きくなかった、被災地はあるけれども大丈夫だったということを広報する「タミル・ナードゥ・ツーリズムがあなたの質問に答えます」という『津波後』と題したパンフレットを出したりしています。このパンフレットの中には、先ほどご紹介したマーマツラプラムの新しい遺跡の発見についても言及されておりまして、今回の津波による新しい発見も何とかこれからの観光に生かそうということも考えられているようです。

5 復興事業の現状

5.1 コーディネーション体制

最後に、復興事業の現状について簡単にご説明したいと思います。

まずはコーディネーション、連携の体制についてですけれども、タミル・ナードゥ州政府は、津波の復興事業のための特務官というものを設けました。実際にその復興事業は、州の中の県レベルの役所あるいはNGOが中心になって行っているわけですが、この特務官は、いわば長期の対策を策定するというのが主な役割です。というのは、県レベルでは、現状の復興事業を実際に行うという対応で手いっぱいでありまして、さらには、県知事の任期というのも長くはなく、それほど長い期間を見通した計画というのはなかなか立てにくい状況なので、そういう長期を見通した対策を策定するのが私たちの役割だということを言っていました。

実際の仕事としては、各部署から回ってくるリストとかレポート、各県から回ってくるものとか、あるいは州の各役所から回ってくるものをチェックし、許可したり承認したりすることです。彼の部屋には各県知事とのホットラインが設けられていて、私が行ったときにも、4～5回ナーガパッティナムの知事にすぐ電話していました。

さらに、ここでは各県の復興事業の進行に関する最新データをまとめておりまして、

それをウェブで毎日更新して掲示している。それによって、各県の間で情報を共有して、連携に役立てています。

県レベルでのNGOとの連携ということでは、ナーガパッティナムの例をご紹介しますと思います。一番被害が大きかったナーガパッティナム県では、NCRC (NGO Coordination and Resource Center)というNGOがありまして、これはナーガパッティナムの県庁の中に部屋を借りて、事務所を持っています。ここがナーガパッティナムの各被災地の中で活動しているNGOの間の情報提供、政府の各部も含めて県の役所、そして各NGO、それから地元被災民の連携をとる、情報を伝達するということの役割を果たしています。ここにいろんな情報が集まってきて、そこから情報が発信されることで連携をとるという形をとっているようです。

ナーガパッティナムの県庁の3階の一室にこういう形で、「NGO Coordination and Resource Center」というNGOのオフィスが設けられています。これがオフィスの様子です(写真34)。小さなもので、実際に働いているのは3人だけでしたけれども、ほとんどコンピュータを専門としている人たちが、コンピュータを通じて情報を流したり、情報をまとめたりといった形の仕事をしています。ここに来れば、復興事業の情報などがある程度集まるという状況です。

さらには、NGOが実際の例えば復興事業、これからご紹介するような恒久住宅の建設などをやっているわけですが、被災した村をそれぞれのNGOが担当するという形で行われていました。例えば、「この村はうちがやります」と手を挙げたところにやらせるという形で、それぞれのNGOが被災した村を担当して、そこで恒久住宅を建設することになります。

実際の土地は政府が供与するわけです。土地は政府の土地であることもありますし、ある程度寺院とか公共機関が持っている土地を借り出して、供与するということもあります。ですから、所有権は、そのまま政府であったり、もとの持ち主にありますが、居住権が住民に与えられるという形になるようです。その土地は、ナーガパッティナムでは、海岸から500メートル以上離れたところの土地しか供与しないという形で政府が土地を供与しています。



写真34

こういう形でかなり復興が進んできています。ナーガパッティナムの港の場合も、かつては船がばらばらになっていたところが、かなり船がそろって、もう漁にも出始めているという状況で、復興事業がだんだん進んできました。

5.2 復興の現状と問題点——特に恒久住宅をめぐって

5.2.1 ナーガパッティナム県

特に、復興事業の現状と問題点ということで、恒久住宅の建設についてお話したいと思います。

ナーガパッティナム県では、今お話したように、恒久住宅建設の主体はNGOになります。政府が土地を供給するわけですが、海岸から大体500メートル以上離れたところに土地を供給します。個々の村での恒久住宅の建設は各NGOが担当します。

住宅の実際の設計あるいは集落のデザインは、各NGOが自前で考えてやります。本来は耐震性・耐災害性の強いものをつくるという目的で、県で五つほどのモデルをつくったのですけれども、実際は個々のNGOが自分たち独自のデザインでやるという形になっています。

その中で、今日は特にサーマンダンペーッタイ（Samanthanpettai）の例をご紹介しますと思います。

ここはアメリカナンダマイと呼ばれるヒンドゥー教系の教団が建設しているところです。ここは毎年のようにいろんな慈善事業をやっているところですので、そういった経験が非常に豊富で、今回も今までの経験を生かして自分たちの自前の作業員を使って作業を行っているわけです。ですから、新しい需要を生み出したりとか、そういう形ではなくて、自分たちがもともと使っていた作業員を連れてくるという形でやっているようです。

その集落のデザインですが、建設のデザインには社会構造が反映されないという問題点があります。後で実際に写真を見ていただきながら説明したいと思います。インドには、ご存じのように、カースト構造があるわけです。サーマンダンペーッタイの場合には、死者が69人出ていて、村のほとんどが破壊されて、ほとんどの人がこの新しい恒久住宅に移住することになります。その新しい村を実際につくるのは、先ほど申しましたようにNGOになるわけですが、完成したその集落は、恒久住宅自体が県にそのまま引き渡されて、県が住民にそれを配分するようになります。ですから、集落をつくっている側が、もとの村がこうなっていたので、そのデザインに合わせてつくるということでつくっているわけでもないし、そうやってつくられたものをまた、政府の方で住民に配分するわけですから、例えばそこにかつてあったカーストの住み分けの構造が実際に反映されるかどうかという、なかなか難しい問題があるわけです。ナーガパッティナム県では、私が行った8月の末ぐらいに初めての恒久住宅の引き渡ししが別の村でありました。何とか政府としては12月いっぱいまでに50%ぐらいは恒久住宅の引き渡しを行いたいということだったそうですけれども、実際にそこまでは多分できていないと思います。そういうことで、今後引き渡しが進んで、実際に住民が住み始めると、どういう問題が起こってくるのか、そういうこともこれからの課題になるというふうに思います。

こちらは、アムリターナンドマイの恒久住宅建設地の立て看板です(写真35)。この教団の教祖は、日本にも来られている「アンマー」という名前で知られている方で、抱擁することによって人の心を癒すという、そういう教団です。

ここに恒久住宅を建設しておりまして、鉄筋コンクリート造りのかかなり強固な住宅がつくられています(写真36)。こういう形でかなりの数の住宅がつくられていまして(写真37)、完成予想図としては、こんな感じになるそうで(写真38)、今までの彼らが住んでいたものに比べてもすぐれたものがつくられるようです。実際の村のモデルなどについては、住民の意見も聞いたそうですが、このような村が出来上がる予定だそうです

(写真39)。多少実際の村は違うんだと言っていましたけれども、例えば、ヘルスケアセンターというのがつくられたりとか、この集落プランの右端真中あたりがヘルスケアセンターだそうです。中央下の部分には市場がつくられたりとか、ほぼ中央にはごみ焼却施設があったり、ほかにも浄水槽があったりとか、そういった近代的な設備も整った新しい集落



写真35



写真36



写真37

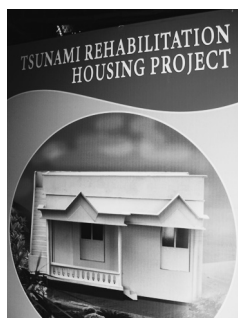


写真38

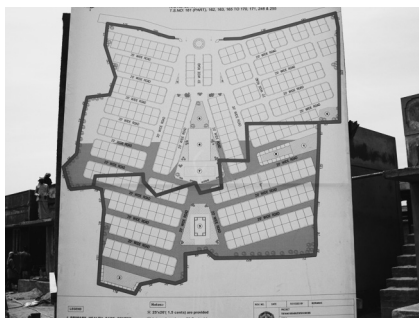


写真39

をつくるということだそうです。このプラン自体が、彼ら自身、実際の村のカースト構造とか、実際の住み分けの構造を考えてつくったわけではありませんし、彼ら教団自体は、これをそのまま県に引き渡してしまうわけですから、県がこれをどういうふうに配分するかというのも全くわからないわけで、実際にどこにだれがどう住むかというのも全然わからない状態です。

そういう中で、今までのカーストの住み分けの構造が崩れてしまう可能性もあるわけですね。そうすると、そのことがこれからの社会にどういうふうに反映するか、どういうふうな影響を及ぼすかということは、まだこれから考えていかなければならない問題です。実際には、例えば、グジャラート地震で被災したため移転した村について調査をされた金谷さんの例がありまして、その調査の場合でも、カーストの住み分けが大きく崩れてしまっているという例があるようです。

5.2.2 カーンチプラム県

次は、チェンナイからすぐ南のカーンチプラム県です。こちらの場合は、先ほどのナーガパッティナム県のように、被害が全村ほとんどに及ぶような例は少ないわけです。つまり、以前住んでいた海岸近くの集落にまだ相当数の家が残っている。一つはこうした被害状況のため、もう一つは、漁民としては海岸からなるべく離れたくないという理由のため、移住には抵抗が強い。ですから、県側が例えば被害を調査する、それは住宅を新しくつくるために被害調査をしているのですけれども、そういう調査票を回しても、それに対して非協力だという問題もあるようです。

ですから、カーンチプラム県としては、先ほどのナーガパッティナム県のように、まとめて恒久住宅を NGO につくってもらって、移転するというよりも、むしろ個々の住宅がもとあったところに新しく建て直すということを優先して、別にそれが海岸から 500メートル以内にあっても認めているということをしていました。

ですから、このカーンチプラム県の例の場合は、新しく恒久住宅ができたとしても、先ほどのナーガパッティナム県とはまた違った社会のあり方、変わらないとか、変わるとかちょっとわかりませんが、実際にこれからカーンチプラム県とナーガパッティナム県を比べてみると、新しい復興の後の移住、そういった問題を考えるにはいい検討材料になるのではないかというふうに思っています。

かなり長い時間お話ししましたがけれども、これで終わりです。どうもありがとうございました。

注

写真 3, 4, 5, 29, 30, 31は、インド中央政府考古局チェンナイ支局提供。

質疑応答

司会：文化財と災害の問題は、日本でも最近注目され、研究者も増えてきているようです。それから最後のほうで、恒久住宅の建設とコミュニティの再建をめぐる今後の着眼点をお話しいただいたわけですが、これら二つを含めてご質問等ありましたら、どうぞご発言をお願いいたします。

高桑史子：首都大学東京の高桑と申します。恒久住宅のことでちょっと教えていただきたいんですけども、先ほどおっしゃったように、社会構造が反映されていないということはちょっと置いておきまして、個々の村を各NGOが担当するということですが、スリランカの場合だと、係わったNGOによって、立派な復興住宅ができているところとそうではない復興住宅ができているところと、村ごとの格差がかなり生じています。そのようなこともこのナーガパッティナム県の例で起こっているのかどうか。

もう一つは、スリランカで、去年の11月に行ったときに聞いたのですが、海岸部の津波の被害を受けていないところに住んでいる人たちは、復興住宅の入居者に対して「あいつらは、前よりもいい家に住んでいる」みたいな、言い方をしていました。

そういうNGOごとによる違いとか、あるいは、今見せていただいたような非常にいい村ができることによって、ほかの隣人との摩擦のような問題は起こっていないのでしょうか。摩擦が起こることを前提に話していくのも変ですが、そういう問題が生じていないか教えてください。

深尾淳一：最初の点ですけども、今回は予備調査で、ほかの恒久住宅建設地については調査していないものですから、実際どれぐらい違いがあるかというのはちょっとわからないのですが、NGOの質だとか、今回のアムリターナンダマイは、かなり大きな教団ですし、今までの経験も豊富ですから、かなりまとまったものをつくっていると思いますし、ほかには余り経験がなかったりだとか、そういうNGOも幾つかあると思うんですけども、それによってかなり違いは出てくるとは思います。

2点目についてですが、今回の村の場合も、全村が完全に移村するわけではなくて、実際にまだ海岸に近い部分に住んでいる人も多少はいるんですね。そういう人たちが今回ここに入ってくるのかどうかわからないんですけども、それはもとの家に住みたくて住んでいるんだと思うんです。新しいところに住むよりも、自分たちがもいたところにいたほうがいいのか、海岸に近いから便利だとか、いろいろ理由はあるのでしょうか。それと新しいところに住む人といろんな摩擦もあると思いますし、逆に「私はあそこに行きたくないから、ここにいるんだ」とか、いろいろそういう部分もあると思いますので、なかなか一概には言えないと思いますが、そういう問題もあるんだと思います。

高桑史子：わかりました。ありがとうございました。

牧 紀男：京都大学防災研究所の牧と申します。2点教えていただきたいんですけども、両方とも住宅の復興に関することです。

1点目は、この7月20日から8月5日に行った時のインドネシアだと、まだテント居住と仮設住宅が混在するような状況だったのですけれども、その住宅復興の進み具合が、その時点ではどうだったのかというのが1点目です。

2点目は、カーストの住み分けの問題です。カーストごとに、例えば職業による家のつくり方とか、家のサイズというものは、もともと違っていたのか違っていなかったのかというのを教えていただきたいのです。

深尾淳一：1点目についてですけれども、7月とか8月の時点で、ほとんどは恒久住宅には住んでいないという状態ですね。私が行って、8月下旬にようやく恒久住宅への引き渡しが行われたという、そういう報道がありましたので、私が行った時点では恒久住宅に移ったという例はまだありませんでした。

先ほど言いましたように、何とか昨年未までに50%ぐらいは恒久住宅をつくりたいというのが政府の方針でしたけれども、実際のことはわかりませんが、そこまでの状況を見ると、多分無理だっただろうと思います。

2点目についてですが、カーストによっての違いというのは、私も詳しいことはわかりませんが、例えば、同じカーストの中でも、収入の違いもありますし、カーストによっても、同じ漁民であっても、沿岸漁業ができる人たちと内水面漁業しかできない人たちとかいろいろあって、それによって収入の違いもありますから、当然住宅の規模も違ってくると思います。サイズとかどうなのかというのは、ちょっと私はわかりません。今回の恒久住宅は全く同じデザインのものをつくるということだそうです。

司会：今の牧さんのふたつ目のご質問に関連しますが、家のサイズ、間取、デザインなどに、カーストごとの明確な違いというのはあるのでしょうか。

深尾淳一：かなり漁民の間にも階層差があります。ですから、今回の復興住宅に一体その中の漁民のどの層がどういうふうに入っていくかというのは、今後きちっと調査をしなければならぬところだと思います。漁民の間にまた雇用関係もありますので、それがまたカーストグループの分業みたいな形にもなっています。

寺田匡宏：千葉の国立歴史民俗博物館の研究員をしています寺田と申します。日本史を専門にしまして、文化財等に関心があるものですから、その件で二つほど質問させていただきたいと思います。

一つは、現地では何が「文化財」と考えられているのかということをお聞かせいただきたいと思います。といいますのは、日本の災害でも最近「文化財の保存」ということが言われるようになってきました。その場合、「文化財」概念に非常に巾があり、国や県などの自治体によって「文化財」と指定された文化財を「文化財」ととらえるのか、あるいは、地域の各村にあるような古文書などまでも含めて「文化財」ととらえるのか

という問題があります。現実的には、博物館や指定された遺跡などに復旧・保存の支援が行きますが、一方で、村の家々に残されている古文書などには、なかなか支援が行き届かない。そこで、NGOや、市民や研究者が漏れた部分をカバーしていくという構造が最近の流れになりつつあります。そういった日本の状況と対比したとき、インドでの文化財概念というのはどうなっているのか、そしてそれに対する支援や一般的な体制がどうなっているのかをお聞きしたい。これが一つ目です。

もう一つは、その際に、文化財に対して救援をすることに対する人々の意識をお聞きしたいと思います。といいますのは、やはり災害とは人の生き死にが問われる局面で、そういったときに文化財云々というのは現地でどうとらえられるのか。倫理あるいは心理的な障壁があるのか、あるいはそういったものは全くないのか。日本の場合でも、災害で人の命がかかっているときに、なぜ文化財のことを言うんだという声もありました。人々のメンタリティを教えていただければと思います。

深尾淳一：1点目についてですけれども、向こうの人たちの文化財にかかわっている人たちの考え方としては、例えば、文化財というのは、中央政府の考古局が指定している、管轄している文化財という一つのレベルがあって、その下に州政府が管轄しているレベルの文化財があるという感じでしょうか。それ以外のものは、普通の人たちにとっては、「文化財」という意識は余りないのじゃないかと思います。例えば、先ほどご紹介した中では、タランガンバーディのすぐ近くにあるマシラマニナーダルという寺院の例をご紹介しましたがけれども、あの寺院は、現在ではほとんど信仰の対象にはなっていない寺院なんです。実際には寺の司祭が来て毎日礼拝をやっているとは言っていますけれども、ほとんどの人にとっては「壊れた寺院」というイメージしかなくて、彼らにとっては、それは文化財ではなくて、「壊れた建物」というぐらいのイメージしかないんですね。ですから、普通の民間の人たちにとっては、「文化財」という概念がそれほど強くないものですから、州政府にとっては、州政府の指定している、管轄しているのが文化財であり、中央政府にとっては、中央政府が管轄しているものが文化財であるという、そういう考え方じゃないかと思います。

もう一点についてですけれども、民間にとっては、今お話したように、文化財というものの自体に余り関心がないものですから、例えば、それに対して州政府が修理しようとかいうことをやっても、それ自体に余り関心がないわけです。ですから無頓着というか、そんな感じじゃないかと思います。

ただ、今回行った中では、アーランバライという城塞がありましたけれども、あそこは州政府の管轄の遺跡でありながら、全く管理がされていない、被害の後にも修復が全然なされていないというところで、そこで私が出会った人たちは漁民で、津波の後は魚が余りとれなくなっちゃったので、何とか観光でやっていきたいというふう考えている人たちがいて、実際にその時も、一生懸命ボートに乗れなんて誘われましたけれども、

そういう形で、あそこの遺跡がもし修復されて、観光客がたくさん集まれば、自分たちにとっても利益になるというふうに考えている人たちは多少いるとは思いますが。

田中雅一：京都大学の田中と申します。先ほどの牧さんの2番目の質問ですけれども、災害前のもとの家がどうなのかお聞きしたと思いますが、その質問の意図について、ちょっと説明してもらえませんか。

牧 紀男：私は建築出身でして、そういうのはどういうふうにデザインしたらいいかというのに関心があるわけですね。いろんなところで災害後の新しい再定住地のデザインがどうなっていて、それがどういうふうな形で住みこなされ、さらに使われていくのかというところに非常に関心がありまして、先ほどのような質問をさせていただきました。

同じインドネシアのフローレス島で1992年に津波の災害があったんですけれども、その場合は、フローレス島はカトリックがかなり多くて、ムスリムとカトリックでモスクをつくって、上側にカトリックを入れて、下側には、ムスリムは漁民でしたので、下側の海に近いほうに入っていた。ただ、家は同じです。クワハウジングという手法で、キッチンと水回りだけをつくって、後は所得に応じて自動的に自分たちで増築をしていくというような形の住宅供給をしたら、しばらくすると、住まい方がそれぞれごとに違って非常におもしろかったということがありまして、そういった面から今のような質問をさせていただきました。

田中雅一：大きな家に住んでいた人には支援を多くするとか、そういう意味ではないわけですね。

牧 紀男：別にそういう意味じゃないわけです。日本の場合だと、そういうふうになるでしょうけれども。前の家の状況をもう少し反映したようなデザインをNGOもすればいいなというふうなことを思ったわけです。

金谷美和：京都大学の金谷と申します。先ほど恒久住宅の建築をめぐるカーストの住み分けが起こっているというお話をなされたのですが、私が調査しているグジャラート西部地震、震災が2001年1月でしたので、もうすぐ5年になりますが、確かにそういうことが起こっているんですね。宗教別あるいはカースト別に村が分裂したりとか、あるいは市街地に関しても、それまで割と混住していたものが、カーストごとにあるいは宗教ごとに分かれて住んでいるということが起こっているんですね。

そういう状況が起こっているんですが、それをどういうふうに考えた方がいいのか、どういうふうに評価あるいは批判したらいいのかすごく迷うところです。というのは、それは大体においてNGO主導で起こっているんですが、住民のほうが特定のNGOにアクセスして、自分たちに援助してほしいといったときに、住民がカーストごとあるいは宗教ごとにグループをつくってNGOにアクセスしていく。住民主導というところがすごく大きくあるわけです。

そうやって村が分裂していったりということがありますが、一方で、地元新聞です

ね、ローカル新聞の論調では、そのような住民の中同士の宗教ごとあるいはカーストごとに分かれて住んでいくということに対する懸念というのが論調として起こってきているんです。それはよくないことであろう。というのは、特に宗教ごとに分かれていくと、グジャラート州というのは、震災後2002年にヒンドゥーとムスリムの暴動があって、かなり宗教間対立が激しい州でもありまして、カッチ県そのものではそのような暴動が起こらなかった地域なんです、そのようなグジャラート州全体の宗教間対立というものがカッチ県にも波及するのではないかというふうに恐れているという論調がローカル新聞なんかに出てきています。

ですが、考えてみると、住民にとっては、住みやすさを選択して出てきた結果でもあるとも言えるのです。特に、下位カーストの人たちは、それまで住んでいた村を出て、自分たちだけで村をつくるということを行っている。それは自分たち自身の住みやすさなり、利益なりというものを換算した結果であるとも言えるのです。

ですから、それをどういうふうに評価あるいは批判していったらいいのか、あるいは、今後の復興住宅建設というところにどういうふうに反映していったらいいのかというのが、私自身すごく考えさせられているところですが、そのあたりについて、南インドの事例でご意見というか、アドバイスを調査されたところでいただければと思います。深尾淳一：おもしろいお話だと思います。今までの伝統的な社会がそのまま移住していくということが大事なのかどうか、それによってまた新しいものをつくり出すというのも一つのあり方ではないかという気もします。ただ、グジャラート州の場合と違うと思いますのは、今のお話ですと、かなり住民主導でそういう住みかえが起こっているみたいなお話でしたけれども、ナーガパッティナムなどの場合は、そういうのではないような感じがします。むしろ公な部分、NGOだとか、県だとかが中心になってやっているという感じです。その後どういうことが起こるかというのはこれから見てみないとわかりませんが、そういう部分も違ってくるのじゃないかと思います。お答えになっているかどうかわかりませんが。

司会：仮設住宅、恒久住宅の供給をめぐるっては、特にNGOが、先ほども私のお話の中でも述べましたように、競争状態の中で供給していくと、さまざまな住宅が供給されてしまって、それを受け取る住民側に不平、不満が醸し出されてしまうというケースは、この南インドだけではなく、ほかの被災地でも起きているようです。この点、やはりNGOの支援のあり方というものについてどういうふうにアプローチするかというのも今後の大きな課題の一つかというふうに考えております。

まだご質問とかご意見とかあると思いますが、時間が超過しておりますので、ここで深尾さんのご報告を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。